

本論文は、軍記物語の作品の一つである『保元物語』『平治物語』の諸本の中でも、「流布本」と呼ばれる、物語の改作の最終段階に位置する諸本に焦点を当て、どのように先に存在した物語の内容を取り込み、流布本が作られ、そして後世に影響を与えたのかという、流布本『保元物語』『平治物語』の成立と物語の変遷・展開を説明することを目的とする。それを通し、十五・十六世紀という室町末期・戦国期の文学と社会の関係や当時の文学の在り方を把握し、軍記物語が改変されるとはどういうことなのかを明らかにしていく。なお、構成は既発表の論文十三編の内容に加筆・修正をしたものと新稿三編に、序章・終章を加えたものから成る。

『保元物語』『平治物語』は、それぞれ保元の乱・平治の乱を主材とした作品である。これらの乱に対しては、早くから、慈円（一一五五～一二二五）による『愚管抄』に「保元以後ノコトハミナ乱世ニテ侍レバ」、「日本国ノ乱逆ト云コトハヲコリテ後武者ノ世ニナリニケルナリ」、「連々乱世」と記されることに代表されるように、多くの歴史書の中で、保元の乱・平治の乱以降、動乱の時代が訪れたというイメージが付加されていく。つまり両物語は、動乱の顛末を書いた物語として捉えられていったと言える。両物語とも流布本段階のテキストは、先行研究と近年の論者による成果から、十五世紀後半から十六世紀前半頃という時代に成立したことが明らかになった。つまり流布本が成立したのは、応仁の乱（一四六八）や明応の政変（一四九二）が起きた、社会の動乱期に該当する。動乱の顛末を書いた物語が、実際に社会の動乱期に享受されるにあたり、どのように改作されたのかを説明することは、社会における軍記物語の在り方、すなわち〈戦争を書く文学〉の存在意義や、人々が戦いをどのように受容していくのか、あるいは戦いを表現するときにはどのような意識を持つのかといった問題を解く手掛かりとなる。

そのために、流布本両物語の成立とその背景にある、諸本の流れや時代状況などを検証し、後世への展開を見ていくこととした。それにより従来見過ごされてきた、①物語性という観点以外から見る作品の価値、②流布本（後出本）の成立・受容から捉え直した物語の変遷や展開、③十五・十六世紀という室町末期から戦国期の社会における軍記物語や文学の在り方を研究成果として示した。

結論としては、流布本『保元物語』『平治物語』は強い教訓性を帯びているという特性を持ち、その改作の背景として、当時の教訓書の隆盛との関わりがあることが見えてきた。教訓書の中に軍記物語が活用されていることはこれまで指摘されていたが、軍記物語自体も当時の教訓書の隆盛を受けて変貌を遂げている可能性が高いことを見出した点が本論文においては最も重要であり、今後の研究の軸ともなる結論である。以下、目次に沿って結論に至るまでの論の展開を説明する。

序章

序章では、まず研究史を概括しつつ、問題点を挙げた。『保元物語』『平治物語』は、『平家物語』を始めとする他の軍記物語の作品と同様、改作されつつ人々に享受されてきた歴史を持つ。そのため、内容の大きく異なる諸本が複数存在する。『保元物語』『平治物語』の場合、戦後の研究史を顧みると、諸本の中でも比較的古態に近いとされる一類本である半井本や陽明文庫本・学習院大学図書館本、その後物語性を高めて改作されたとされる四類本に位置する金刀比羅本の研究が中心に行われてきた。それは、戦後、研究が再出発する中で着目されたのが、どの本が最も原作に近いかという、古態をめぐる研究であったことに由来する。そしてその研究対象は一類本と四類本に絞られた。『保元物語』においても『平治物語』においても一類本の方が四類本よりも比較的古い形を残した本文であることは、先行研究によつてほぼ決着したと考えられる。こうした古態を追究する研究には、一類本・四類本の内容面からの分析も不可欠であり、物語に対する考察は深められた。しかしそれは一類本・四類本の研究動向においてのみ捉えられる状況であり、他の諸本に関しては研究すべき事柄が多く残されている。

とりわけ流布本は、物語の改作の最終段階に位置し、歴史上人々に最も多く読まれた本文であるにも関わらず、正面から研究されることは少ない。近年の研究動向を見ても、一類本・四類本を主立って重視・対象にする研究の流れは『保元物語』も『平治物語』も未だ続いており、流布本を軽視する姿勢は根本的には変わっていないのが現状である。しかし物語の比較的初期から中期にかけての成立過程の大筋が掴まれている今、その段階を経て、更にもどるように物語が変遷していったのかという、広い視野をもって作品を捉えなくては、『保元物語』『平治物語』の研究、ひいては軍記物語研究は発展していかないのではないかと考えられる。また、従来の流布本研究の多くにおいて、『保元物語』と『平治物語』がそれぞれ別個に分析されていることも問題として挙げられる。確かにこの二つの物語を分けて考えていくことは、『保元物語』や『平治物語』の研究の上で必要な観点であった。しかし、流布本両物語が共に享受されてきた以上、その状況を踏まえ、両物語を今一度共に比較・分析する必要があると考える。このように研究史上の問題点を踏まえ、流布本『保元物語』『平治物語』を取り扱う意義を示した。

第一部 流布本『保元物語』『平治物語』の成立

第一章 流布本『保元物語』『平治物語』の誕生

第一節 成立期の下限―『楊鳴曉筆』との関係から―

第一部では、流布本『保元物語』『平治物語』の文学的価値について、その成立と特性の解明、そして物語の本質という問題を中心に三章を立て、検討を加えた。これまで、流布本が先出諸本の特性を明らかにするための比較材料としてしか扱われず、その価値が看過されてきた原因として、成立に関する研究の不充分さという問題があると考えられる。第一章は、その成立に関する基礎的な問題を検討する二節から成る。第一節は、従来未詳であった、流布本の成立期の下限を明らかにしたものである。先行研究の問題点を検討した上で、流布

本と『楊鳴曉筆』との関係を検証し、下限が従来考えられていた江戸時代付近ではなく、一五五〇年〜一五六〇年前後という十六世紀半ばの戦国期まで遡ることを明らかにした。これにより流布本を検証していくことは、社会の動乱期における軍記物語の在り方の問題へと繋がることを指摘した。

第二節 流布本『保元物語』『平治物語』相互の影響関係―言葉の交錯の吟味から―

第二節は、流布本段階においても『保元物語』『平治物語』が互いに影響し合って成立していることを、言葉の交錯の面から明らかにしたものである。両物語は作品内の文脈の整合性を越え、各物語に特有の表現を共通して用いて物語を書いていることを証明し、両物語を併せて論じる必要性を指摘した。それはすなわち、話の整合性だけでは評価し切れない文学の世界があったことの解明にも繋がり、物語同士の横の繋がりにより作品の世界が拡大しているという、流布本が成立した十五・十六世紀当時の自由な文学の在り方を指摘した。

第二章 流布本『保元物語』『平治物語』の特性

第一節 全体志向の個別性

第二章では四節にわたり、流布本の内面に焦点を当て、その特性を検証した。第一節では流布本『保元物語』と流布本『平治物語』が影響関係を持つて成立しつつも、異なる志向を持つことを明らかにした。各物語の敗者の扱い、批評記事、反復される言葉などを検証すると、流布本『保元物語』は〈秩序〉を価値基準とし、〈世を乱してはならない〉ということを読み、流布本『平治物語』は〈武士の振舞い方〉を価値基準とし、〈世の統治に何が必要か〉を説いており、別の視座に基づき物語が成立している。一方それは、十五・十六世紀当時の文学の在り方や物語の本質の違いの問題にも繋がることを指摘した。

第二節 人物造型について―為義・義朝像の拡大を通して―

第二節では流布本両物語において、人物造型がどのようにされていたのかを論じた。流布本『保元物語』では源為義を、流布本『平治物語』では源義朝を重視しており、物語それぞれが重視している価値観が説得力を持つように人物造型を行っている。その手法として、「朝敵」という言葉を避け、〈父親〉を重視するという共通の姿勢が見えることを明らかにした。

第三節 女性哀話の改作意図―母の側面の後退―

第三節では流布本段階における女性哀話の改変に焦点を当て、流布本は為義北の方の哀話や常葉の哀話において、子どもと関わる部分を比較的省筆し、先出諸本とは異なる部分に比重を置いて改作をしていることを明らかにした。それは作品内部における父親重視の姿勢を支え、さらには外部の世界との連動が考えられることを指摘した。

第四節 子どもの哀話の改作方法―涙の削除を中心に―

第四節では子どもの哀話の特性を検証し、流布本両物語において涙の表現が意図的に削除されており、それが各作品の重視する価値観や作品世界を支えていることを明らかにした。子どもの哀話を通して教訓を示すという改作の流れは御伽草子の世界などにも見える

が、涙を徹底して削除する流布本両物語からは、それとはまた異なる、当時の子どもへの理想の一面が見えることを指摘した。

第三章 流布本から見た〈保元物語〉〈平治物語〉の変遷と本質―先出諸本の享受―

第一節 金刀比羅本『保元物語』『平治物語』の〈武〉の行方

第三章は二節から成り、流布本が先出諸本をどのように解釈し、そして新たに物語の世界を構築していったのか、歴史認識の問題なども併せて検証した。第一節は金刀比羅本の〈武〉に関わる表現に焦点を当て、流布本両物語ともに、金刀比羅本の内容を肯定・否定するいずれの場合においても、流布本独自の表現をもって武士の逸話を再構築していることを明らかにし、物語の変遷を追った。

他の諸本についても流布本との関連性の検証は進めており、引き続き研究はまとめていく予定である。一例を示せば、京図本段階における改変を流布本が引き継いでいる面もあり、さらに書陵部蔵『保元記』との関わりも見出せることから、流布本から先出諸本を遡り、あるいは後出諸本との交錯を検証することで、新たに諸本の流れが見えてくるのではないかと考えられる。

第二節 流布本『保元物語』『平治物語』における物語の本質と歴史認識―先出諸本に対する読みから―

第二節では、流布本『保元物語』『平治物語』が影響関係を持ちつつ、なぜ別の価値観を説く物語へと終着したのか、流布本の改変から先出諸本に対する「読み」を捉えることで検証した。流布本『保元物語』が戦いを抑制し、一方で流布本『平治物語』が乱を武士の振舞いを説く格好の材料とするのは、それぞれの乱の認識、そしてそれによる作品の本質の見方の違いに繋がることを指摘し、流布本『保元物語』は〈動乱の始まり〉を、流布本『平治物語』は〈安定の始まり〉を書いた物語として作品を捉えていることを検証した。そして流布本は各乱を単なる物語の題材と見ているわけではなく、流布本の改変が、従来の諸本の改変とは全く異なる性質であることを明らかにした。

以上のように、第一部においては流布本『保元物語』『平治物語』の成立期の下限を定め、そしてその成立期と特性の連動、さらには流布本が物語の本質をどのように見ていたのかということ明らかにしたこと、さらに小括では、このような作品を作り上げた作者に関する見通しとして、流布本『保元物語』の場合、作品生成の周辺に、寺院周辺の知識からの影響を考える必要があることを述べた。

第二部 流布本成立以降の〈保元物語〉〈平治物語〉の展開

第一章 近世における『保元物語』『平治物語』の受容―絵画と写本の世界から―

第一節 早稲田大学図書館蔵『平治物語絵巻 六波羅合戦巻』から見る模本の世界

第二部では、流布本の本文や内容、その受容の状況自体を基軸として、近世・近代といっ

た各時代でどのように物語が発信されたのか、その実態を明らかにした。第一章は近世における受容に焦点を当てた三節から成る。第一節は、流布本が活用された一例である早大本の検証から、江戸時代に発展した模本の世界を捉えるとともに、早大本が『平治物語絵巻』の世界とテキストの世界との新たな交渉が見える資料であること、さらには他本には見えない第一段詞書には乱の説明が書かれており、その後半部は頼朝の説明から平家の滅亡にも触れつつ、「源氏の代」になった記述に繋がっていることから、当時、平治の乱がどのように捉えられていたかという早大本の解釈・当時の歴史認識を捉えることも可能であることを指摘した。

第二節 センチュリー文化財団蔵(斯道文庫寄託) 奈良絵本改装絵巻『平治物語』と諸本の交渉

続く第二節では、第一節と同じく近世における絵画資料のうち、奈良絵本のセ本を対象として、この本が他の奈良絵本同様に版本の内容を基にするのではなく、金刀比羅本系統の本を用いながら杉原本と呼ばれる諸本とも交渉関係にあること、さらに杉原本から派生した『絵詞平治』とも密接に関わる可能性を示した。すなわち、セ本を通して流布本以外の諸本の享受の在り方を検証しつつ、当該本が、近世においては流布本が享受の主流であり、奈良絵本に採用される本文も流布本が多いという状況を相対化することの出来得る本であることが確認出来た。

第三節 近世における〈武〉の物語の役割の一例―津田葛根と書物との邂逅から―

さらに第三節では、第二節同様、流布本以外の本文を持つ諸本が、流布本が最も享受された近世においてどのように扱われていたのかという問題を、早稲田大学図書館に所蔵される『保元物語』『平治物語』の識語を書いた「津田葛根」という人物の素性を追うことで明らかにした。それにより軍記物語を始めとする〈武〉の書物が文学としての役割を越え、過去の歴史を捉えるための一つの窓口であったということや、こうした軍記物語の享受の実態の解明が、近世の知の形成という大きな問題にも繋がることを指摘した。

第二章 近代における『保元物語』『平治物語』の変様

第一節 近代日本における『保元物語』『平治物語』の発信―流布本を基軸として―

第二章は近代の『保元物語』『平治物語』の変様を論じた。第一節では、近代において物語がどのように発信されたのか、その実態を明らかにすることで、物語の解釈がどのように変化し社会に影響を与えていたのか、そしてそれは流布本の志向とどれほどの距離を生み出していたのかを、流布本の特徴を基軸にすることで捉えた。物語は明治・大正・昭和期において時代ごとに異なる観点で解釈・発信されていくが、『平治物語』の義平よりも『保元物語』の為朝の享受において変動の大きさが確認出来る。それは各物語で異なる読みの役割が期待されていたためと考えられる。さらに児童書においては、為朝の勇猛さや孝行が伝わるように内容が作り上げられ、児童の訓育を意識して物語が発信されていることなどが明らかにした。

以上のように流布本は、江戸期は勿論、明治や大正、昭和期にも広く人々に発信され読まれ続け、その時代ごとの歴史認識や教育の形成にも関わっている。これらのことから、流布本という存在が、幅広く日本の文学・文化・社会を捉える軸となる可能性が見出せるのである。

第三部 室町・戦国期の文学と社会―流布本生成に至る土壌―

第一章 室町・戦国期の文学の表現世界

第一節 流布本『保元物語』『平治物語』の言葉の世界―他作品と併せて

第三部では、軍記物語を取り巻く作品や意識の連関に焦点を当てたものである。流布本『保元物語』『平治物語』がどのような作品と関わりを持っていたのか、そして流布本が成立した室町末期・戦国期はどのような時代であるのか文学側の世界から捉えることを目指し、文学の生成に社会がどう関わり、それらの文学が後世へどのように繋がるのかも含めて検証した。第一章は第一節から成り、流布本の言葉の用例を見ると、影響関係は両物語間だけでなく、十五・十六世紀の他作品にも関わることを指摘し、流布本『保元物語』『平治物語』を中心に、十五・十六世紀当時の文学作品同士の繋がりを捉えた。

第二章 室町・戦国期の文学と社会の連動―乱世意識・教訓との関連―

第一節 『楊鳴暁筆』の諸本に関する一考察

第二章は二節から成る。第一節は第一部・第一章・第一節を支える論でもあり、流布本両物語の明確な享受が分かる『楊鳴暁筆』の基礎的研究となる、諸本の把握や後世の展開を明らかにした。同時に、筆者が当時の世をどう捉えていたか、すなわち流布本がどういう思考の人間に読まれていたかを把握するために、作中に見える当時の世の中に対する認識を検証した。『楊鳴暁筆』の作者は当時を乱世と認識しており、そうした人物に教訓性を帯びた流布本両物語が読まれていた意義を考えるべきであることも指摘した。

第二節 「血気の勇者」にみる室町期以降の価値観と文学・社会の交わり

第二節は流布本『保元物語』『平治物語』に見える「血気の勇者」という語句表現が、十五・十六世紀やそれ以降の時代に、文学世界や社会にどのように波及していたのかを探究した論である。「血気の勇者」はもともと軍記物語の一つである『太平記』に現れた独自表現であるが、十五・十六世紀頃には武家の故実書などで重視され、流布本『保元物語』『平治物語』を含む多数の軍記物語に新たに教訓的な言葉として利用されているという現象を指摘し、それが近世以降も日本人の価値観形成の一端を担っていたことを分析した。すなわち、室町・戦国期の軍記物語と教訓書は複雑に影響し合い、以降の社会にも影響していると考えられるのである。このことは、軍記物語と教訓書の関連性の研究が、中世日本、そして近世以降の日本をも捉えるのに有効であることを示している。

以上のように、流布本『保元物語』『平治物語』とそれらに関わる作品を検証していくことで、流布本両物語の成立当時、どのように文学同士の交流や世の中への認識、さらには教訓意識があったのかを探り、それが軍記物語といかに関わるのかを検証してきた。特に乱世への意識や教訓の世界は流布本『保元物語』『平治物語』のみではなく、多くの文学作品にも関わることから、広く中世以降の日本を捉える基軸と成り得ることを示した。

終章

以上を考えると、流布本が物語性を主な目的として改作しているわけではないことは明白であるが、そのために日本文学の観点から研究する価値がないとはみなすことは出来ない、多様な問題を孕んでいる文学作品であることが明らかとなった。本論文では、流布本を主軸として、物語がどう改作されるのかという問題の一例を示してきたが、そこには中世に限らず、文学が社会に合わせて存在している実態が見えてくる。こうした日本文学と社会の問題は、歴史、特に戦争を扱った軍記物語であるからこそより具体的に見えてくると言えるのではないだろうか。

さらに、流布本両物語が敢えて改作という手法を用いているのは、改作することにこそ意義があったからではないかと考えられることも指摘した。つまり、流布本は、先行するイメージや文章表現を逆手に取ることで自らの主張を発信するという手法を取っているのではないかと考えられる。

そしてその改作の背景として、教訓書との関わりがあることが見えてきた。十六世紀頃に成立した教訓書においては『保元物語』『平治物語』に限らず、他の軍記物語の内容も、過去の歴史から得た鑑戒として活用されている。そのため、『保元物語』『平治物語』の研究を通して得てきた成果は、中世における軍記物語と教訓書の問題の一つとして、さらに広い視野のもとに位置付けていく必要があると考えられる。